

2020サクラだより32

「サクラ」(雑学)

さくら／桜

Japanese cherry

[学]Prunus

バラ科の落葉高木または低木で、おもに北半球の温帯と暖帯に分布する。サクラ属のうち、スモモ、モモ、ウメ、ニワウメ、ウワミズザクラなどの亜属を除いたサクラ亜属のものを一般にサクラと称し、花の美しいものが多く、日本の花の代表として外国にも知られている。なお、食用のサクランボはカラミザクラ（唐実桜）やセイヨウミザクラ（西洋実桜）などの系統のものである。日本の山野にはヤマザクラなど約 10 種類を基本にして、変品種をあわせると 100 種類ほどのサクラが野生しており、また、これらから生まれた 200～300 の園芸品種が知られている。江戸時代には品種が区別され、天和（てんな）元年（1681）に出た水野元勝（もとかつ）の『花壇綱目（かだんこうもく）』には「桜珍花異名の事」として 40 品種のサクラが載せてある。最近のものでは『最新園芸大辞典』巻 5（1970、誠文堂新光社）が 305 品種を載せ、『サクラの品種に関する調査研究報告』（1982、日本花の会）には 193 品種が図説されている。



▲生態

日本では、ほぼ全土で何らかの種類が生育可能である。様々な自然環境に合わせて多様な種類が生まれしており、日本においてもいくつかの固有種が見られる。たとえばソメイヨシノの片親であるオオシマザクラは伊豆大島など、南部暖帯に自生する固有種とされる。日本では少なくとも数百万年前から自生しているとされ、鮮新世の地層とされる三朝層群からムカシヤマザクラの葉の化石が見つかっている。全てではないが、多くの種に共通して見られる特徴を挙げる。雌雄同株であり、中高木から低木程度の大きさである。若い樹皮は光沢がありカバノキにも似た水平方向の皮目が出来、この部分は細胞に隙間が生じて呼吸孔になっている。古くなると皮目が消えて表面から徐々に細かく風化していく。葉の形は楕円形であり、枝に互生し、葉の縁はギザギザ（鋸歯）になっている。葉に薄い細毛が生えるものも少なくない。葉は秋になると紅葉する。根は浅く水平に広がり、ここから新たな茎（ひこばえ）がしばしば生え、不定根も良く発生する。

サクラは木を傷つけるとそこから腐りやすい性質を持つ。昔は剪定した部分の消毒も難しかったため、「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」という諺もある。このため、花見の宴会でサクラの木を折る観光客の被害によってサクラが弱ってしまうこともある。しかし適切な剪定は可能である。本来、特に自生種は病害にも害虫にもそれほど弱くはないが、人為的に集中して植えられている場合や人工的に作られた品種はこれらに弱くなる場合もある。

古木として知られる桜も多い。日本三大桜がいずれも樹齢千年を超える老古木となっているほか、五大桜（末尾の写真参照）も古木が多く、内神代桜は樹齢が 1800 年を超えているとされる。それ以外にも有名で長寿の一本桜が多く存在する。

▲形態

サクラ亜属は一般に低木または高木であるが、一部には枝垂（しだれ）性のものや枝がみな上向する品種もある。葉は枝に互生し、**単葉で、葉身、葉柄、托葉（たくよう）をもった完全葉**である。葉身の縁（へり）に鋸歯（きょし）があり、葉柄または葉身基部に**蜜腺（みつせん）**が1対または1～5個あって、蜜を分泌し、托葉は落ちる。花は単生することもあるが、多くは散形または散房花序になって咲く。萼（がく）、花弁、雄しべ、雌しべを備えた両性花で、花托は広がって萼筒（がくとう）状になり、5枚の萼片があって、喉部（こうぶ）に5枚の花弁と萼片とが交互の位置につく。その内側に普通は雄しべが30～50本着生し、雌しべは1本で子房は萼筒状の花托の中にあり、子房は中位。子房は1心皮からなる1室で、1個の胚珠（はいしゅ）を入れているが、そのうち1個が成熟する。果実は核果で、外側が肉質になり、内側に内果皮が木質化した核があり、核の中に1個の種子を含む。

▲花弁の色

サクラの花弁の色は一般的に白色から濃い紅色までのグラデーションの範囲にあり、例外的に黄色のウコンや緑色のギョイコウなどがある。この紅色系の発色はアントシアニンという色素によるものであり、紅葉や若葉の赤系の色もアントシアニンの作用である。アントシアニンの合成には低温と紫外線が必要なため、温暖な地域や年、屋内での育成は白色が強い花弁となりやすい。そのため、クローンであり同じ特質のソメイヨシノでも、温度環境の地域差により西日本より東北の個体の方が紅色が濃いと言われたり、温暖化による年差により昔と比べて白くなっていると言われがちである。また開花から散るまでの色の変化もアントシアニンの密度の変化によるものであり、つぼみの紅色は開化と共にアントシアニンの密度が薄くなって花弁が白くなっていき、散り際には花弁で新たに合成されたアントシアニンが花弁や雄蕊やめしべの基部に集まって赤くなっていく。

▲花弁の数

花を觀賞する栽培品種として好まれたため様々な姿の花が見られ、花びらの数は五枚から百数十枚まで幅広い。サクラに限らないが用語を挙げる。花弁が五枚までのものを一重、五枚から十枚のものを半八重、十枚以上の花弁を持つものを八重といいサクラの場合はヤエザクラと称している。また、花弁が非常に多く、一枚一枚が細長い場合、菊咲きと称する。さらに萼、花弁、雄蕊の中にさらに萼、花弁、雄蕊のある二重構造のものも見られ、これは段咲きと呼ばれる。花弁の枚数の増え方には雄蕊が花弁に変化するものと、花弁や雄蕊そのものが倍数加する変化が見られる。



代表的なヤエザクラのカンザン

▲花の付き方と見分け方

西欧と北米の分類法ではサクラと同じスモモ属となるモモやウメは花柄が短く枝から直接生えているかのように咲くが、サクラとスモモはこれらと違って長い花柄を持っており枝から離れて垂れ下がるようにして咲く。さらにスモモの特徴として前年に葉が有った葉痕の基部に2つか3つの冬芽がつくが、サ

クラは1つの冬芽が付き、これが花の集合体となる花序となり、この点でサクラと近縁の植物の見分けが可能である。さらにサクラの中の種を見分けるには、個体差があって見分けにくい花卉よりも、種ごとの差異が大きく見分けやすい萼や花序の形態に注目する必要がある。

▲開花期

開花期は種や地域によるばらつきが大きい。日本においては1月、沖縄県のヒカンザクラを皮切りに咲き始め、東京ではまずカンザクラなどのヒカンザクラを由来とする河津桜など早咲きの栽培品種が咲き、ソメイヨシノが咲いた後の4月中旬以降にヤエザクラが咲く。北海道のオオヤマザクラは5月に花を咲かせ、標高2000m以上ではタカネザクラが7月に花を咲かす。



クローンのソメイヨシノは同環境下になりやすい同地では個体ごとの開花期の差が少なく、ほぼ一斉に咲き一斉に散る。日本の代表的な品種のソメイヨシノでは、開花から満開まで1週間で、満開から散るまで1週間、花の見頃は悪天で早まらなければ満開前後の1週間程度である。ソメイヨシノはクローンであるため同じ環境にさらされる同地では個体ごとの差異がほぼなく、ほぼ一斉に咲き一斉に散る。なおソメイヨシノが爆発的に植えられる前の江戸時代までの日本では、遺伝的に個体差のあるヤマザクラや多様な栽培品種が花見の主流であったため、個体ごと、種ごとに少しずつ次々と咲いていくサクラを長い期間をかけて鑑賞していくという花見のスタイルであった。

サクラには花と葉が同時に展開する種が多くあるが、日本の野生種の中ではエドヒガンが例外的に葉が展開する前に花が咲く特質を持っており、エドヒガンから誕生した栽培品種のソメイヨシノやシダレザクラもこの特質を受け継いでいる。エドヒガンは他の多くの野生サクラや昆虫の活動期より少し前に花を咲かせるが、他に開花している種が少ないため効率的に虫をおびき寄せることができ、これが生存戦略となっている。なお、花が散る頃に葉が混ざって生えた状態から初夏過ぎまでを葉桜と呼ぶ。

サクラは花芽を作ると葉で休眠ホルモンを作って休眠する。一定の寒さに置かれることによって休眠が打破され、その後暖かくなり始めると開花を迎える。この工程は一般的には冬から春にかけて行われることが多いが、秋に何らかの影響で葉がなくなった場合などに休眠ホルモンが足りず、寒い日を2 - 3日経てその後小春日和になるとこの条件を満たしてしまい狂い咲きが起きる。このように異常な個体の狂い咲きとは別に、毎年春に加えて秋から冬にかけて花を咲かせるジュウガツザクラやフユザクラなどの二季咲きの品種もある。

サクラが以前に比べ若干早く咲く現象も見られている。これには温暖化の影響が見られ、また、都市部で開花が早まることはヒートアイランド現象も少なからず影響している。また、九州では桜前線が、普通とは逆に南下する例も現れた。これは、冬が暖かすぎると休眠打破が起こりにくいため、暖かい九州南部では開花が遅れるのだと考えられる^[27]。これらは季節学的な自然環境の変化を端的に表す指標にもなっている。

▲花の蜜

サクラの花からは蜜が出ているため、サクラの花が咲く時期にはスズメ、メジロ、ヒヨドリなどの鳥類が見られる。メジロは嘴を花に入れて蜜を吸うことが多いが、スズメは嘴が太くて短いため花の横から穴

をあけて蜜を吸うことが多い。

(ソメイヨシノの花を食べるオスのニュウナイスズメ)



▲種類

サクラにはよく知られているヤマザクラ（山桜）やソメイヨシノ（染井吉野）のほかにもいろいろな種類があり、早春から晩春まで各地で咲き乱れ、また四季咲き性のものは初冬にも花がみられる。以下に日本のおもな野生種と園芸種を示す。

▲ヤマザクラ

本州の宮城県から西の日本各地にもっとも普通に自生し、赤茶色に染まった新葉とともに淡白紅色一重咲きの花が散房状になって咲く。各部に毛がなく、葉の裏面は白色を帯びる。ヤマザクラ系には八重咲きのコノハナザクラ（木花桜）やゴシンザクラ（御信桜）などがあり、一重咲きのワカキノザクラ（稚木桜）は二～三年生の幼木で開花する。同じく一重のフダンザクラ（不斷桜）や、ヤマザクラとマメザクラ（豆桜）の雑種といわれるフユザクラ（冬桜）のように、花が初冬と春の2回咲く品種もある。

▲オオヤマザクラ（大山桜）

中部地方以北の本州、北海道の山地に多く生え、四国の石鎚（いしづち）山脈にも自生する。一重咲きである。ヤマザクラより紅色の強い花をつけるのでベニヤマザクラ（紅山桜）といわれ、また北海道に多いのでエゾヤマザクラ（蝦夷山桜）ともいう。新潟県阿賀（あが）町の極楽寺にはノナカザクラ（野中桜）とよぶ、花が大きく紅色の美しい老木がある。

▲カスミザクラ（霞桜）

北海道から九州にかけての山地に自生し、葉や花に毛があることからケヤマザクラ（毛山桜）ともよばれているが、ヤマザクラのように葉の裏面が白くはない。ナラノヤエザクラ（奈良八重桜）はカスミザクラの八重咲き品種であり、長野県塩尻（しおじり）市片丘において発見されたカタオカザクラ（片丘桜）は一重咲きの花が二～三年生の幼木で開花する。

▲オオシマザクラ（大島桜）

伊豆七島に自生し、伊豆半島、房総半島のものは植林したものが野生化したものといわれている。薪炭用に植栽するのでタキギザクラ（薪桜）ともよばれる。白色一重咲きのやや大きい花が開葉と同時に咲き、香りがあり、葉の縁の鋸歯は先が芒（のぎ）状に長くともがる。成長が速く、八重咲きもあり、花は変異性に富む。



▲サトザクラ（里桜）

オオシマザクラを主としてヤマザクラ、オオヤマザクラなどの間で繰り返し交雑され、改良選出された品種の一群の総称。一重、八重、菊咲き、花色の濃淡、香りなど変化に富んだ品種が多数ある。ショウゲツ（松月）、イチヨウ（一葉）、カンザン（関山）、フゲンゾウ（普賢象）などは大輪の八重咲きで、葉状に変化した雌しべが1～2本あり、ウコン（鬱金）、ギョイコウ（御衣黄）など黄緑色八重咲きの花が咲く変わったサクラもある。

▲エドヒガン（江戸彼岸）

本州、四国、九州の山地に自生し、各地に大木が残っている。アズマヒガン（東彼岸）、ウバヒガン（姥彼岸）ともいう。全体に毛が多く、開葉前にやや小形の一重咲きの花が咲き、萼筒は壺（つぼ）形である。枝の垂れるシダレザクラ（枝垂桜）は寺院などでよく植えられ、エドヒガンの品種で八重咲きのヤエベニシダレ（八重紅枝垂）がある。コヒガン（小彼岸）はヒガンザクラ（彼岸桜）ともいい、エドヒガンとマメザクラの雑種で、エドヒガンより葉が小さい。

▲ソメイヨシノ

明治初年ころ、東京・染井（現在の豊島（としま）区巢鴨（すがも）付近）から売り出されたサクラで、いまでは全国各地に広く植栽されている。オオシマザクラとエドヒガンの雑種で、若枝や葉、花に毛があり、開葉前にエドヒガンより大きい一重咲きの花が木を埋め尽くして美しく咲く。

▲マメザクラ

富士山、箱根山に多いのでフジザクラ（富士桜）またはハコネザクラ（箱根桜）ともいい、全体に小形で、開葉前に一重咲きの花が咲く。フジキクザクラ（富士菊桜）はマメザクラの菊咲き品種で、花卉が 360 枚にもなり、雌しべが多数になった花もある。本州の中部地方以西にはキンキマメザクラ（近畿豆桜）が分布する。

▲チョウジザクラ（丁子桜）

本州と九州の一部に自生し、春早くに一重で小形の花が咲く。

▲ミヤマザクラ（深山桜）

北海道から九州にかけての深山に生え、花の柄のもとに小さい葉がついている。また別種のミネザクラ（峰桜）は本州の中部地方以北の高山と北海道に生える。

▲カンヒザクラ（寒緋桜）

ヒカンザクラともいい、中国大陸南部、台湾に分布し、沖縄県のは自生説と野生化説があり、関東地方以西の暖地に植栽される。開葉前に半開の濃緋紅色一重咲きの花が下垂して咲き、沖縄では 2 月上旬、東京では 3 月下旬に咲く。

▲カンザクラ（寒桜）

カンヒザクラとオオシマザクラの雑種といわれ、カンザクラの名にふさわしく、静岡県熱海（あたみ）では 1 月下旬に、東京では 2 月下旬に淡紅色一重咲きの花が咲き始める。ツバキカンザクラ（椿寒桜）はカンザクラとカラミザクラ（唐実桜）の雑種で、桃色一重の美しい花が東京では 3 月に咲く。

▲名所・天然記念物

日本の各地にサクラの名所があるなかで、奈良県の吉野山は古くからヤマザクラの名所として知られ、下（しも）千本、中千本、上（かみ）千本、そして奥千本へと 1 か月余り花が咲き続ける。京都市の嵐山（あらしやま）や醍醐寺（だいがじ）もヤマザクラが多く、茨城県の桜川、東京都の小金井（こがねい）などもかつてはヤマザクラが多数植えられていた名所である。高知県物部（ものべ）村西熊（にしくま）国有林のヤマザクラ林、岐阜県池田町霞間ヶ溪（かまがたに）のヤマザクラやエドヒガンの樹林、新潟県新発田（しばた）市加治川（かじかわ）地区椽平（とちだいら）のオオヤマザクラやカスミザクラなどの樹林が開花したときは壮観である。栃木県の日光中禅寺湖畔、群馬県の榛名（はるな）湖畔ではオオヤマザクラが 5 月上旬に咲き、北海道日高の旧御料場並木、小樽（おたる）市の小樽苗畑（なえはた）、厚岸（あつけし）町の国泰寺（こくたいじ）などいずれもオオヤマザクラの名所である。サトザクラの品種が

多く集められている所としては、京都市御室（おむろ）の仁和寺（にんなじ）、同市上京（かみぎょう）区の平野神社をはじめ、大阪市の造幣局通り抜け、東京都八王子市の浅川実験林桜保存林、北海道松前町の松前公園などが著名である。

ソメイヨシノを主とした名所は各地に多数あるが、なかでも東京都の上野公園、村山貯水池、山口貯水池、福島県郡山（こおりやま）市の開成山公園、宮城県大河原（おおがわら）町の白石（しろいし）川堤防、秋田県仙北（せんぼく）市角館（かくのだて）町の檜木内（ひのきない）川堤、青森県弘前（ひろさき）市の弘前公園などの花はすばらしい。

外国ではアメリカのワシントン市ポトマック河畔のサクラが有名である。これは 1912 年（明治 45）に当時の東京市長尾崎行雄が日米親善のため寄贈した、ソメイヨシノのほか 9 種類 3100 本の苗木がもとになったものである。

天然記念物として保護されている名木も多く、大島のサクラ株（東京都）、狩宿（かりやど）の下馬（げば）ザクラ（静岡県富士宮市）は特別天然記念物に指定されている。山梨県北杜（ほくと）市武川（むかわ）町の山高神代ザクラはエドヒガンの巨木としては日本一であり、岐阜県本巣（もとす）市の根尾谷淡墨（ねおだにうすずみ）ザクラ、山形県長井市の伊佐沢（いさざわ）の久保ザクラなどいずれも大木である。シダレザクラの大木としては福島県三春（みはる）町の三春滝ザクラがあり、いまなお樹勢が盛んである。また、新潟県阿賀野（あがの）市の梅護（ばいご）寺の珠数掛（じゅずかけ）ザクラ、岐阜県大野町の揖斐（いび）二度ザクラなど変異に富んだ花をつけるものもある。

▲栽培

繁殖はおもに接木（つぎき）か実生（みしょう）によるが、挿木のできるものもある。果実を結ばない八重咲きや園芸品種は接木で増殖する。台木は一般にアオハダの挿木苗が使われているが、オオシマザクラの実生苗がよく、エドヒガンなどヒガンザクラ系にはエドヒガンの実生苗を用いる。実生の場合、乾燥した種子は発芽が悪いので、6 月、果実ができたころ、種子をとってすぐ播（ま）くか、翌春まで種子を土中に埋めておいて早春に播く。植栽は、排水のよい適潤な肥沃（ひよく）地で、日当りのよい所を選び、過湿地や風当りの強い所は避ける。

俗に「桜伐（き）る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」のたとえにあるように、サクラは切り口から腐りやすく、また、その部分からの萌芽（ほうが）力が弱いので、剪定（せんてい）はしないほうがよい。やむをえず剪定する場合は切り口に殺菌剤の入った癒合剤を塗布するとよい。てんぐ巣病、穿孔褐斑（せんこうかっぱん）病、がんしゅ病、材質腐朽病などの病気にかかった部分は切除して焼却し、切り口に癒合剤を塗布する。葉を食害するオビカレハ（ウメケムシ）、アメリカシロヒトリ、モンクロシャチホコには、**DEP 剤**、**MEP 剤**などを散布し、樹皮と材の境を食害するコスカシバには **MEP 剤**を樹幹被害部に塗布する。ウメシロカイガラムシは冬季に石灰硫黄（いおう）合剤を塗布するか、初夏に **MEP 剤**を散布するとよい。

▲利用

ヤマザクラ、オオヤマザクラなどの材は良質のやや硬い散孔材で、辺材が黄褐色、心材が赤褐色で光沢があり、加工しやすく、ゆがみが少ないので、器具材、家具材、床柱や敷居などの建築材、小細工物、板木、薪炭など用途が広い。樹皮は樺細工（かばざいく）に用い、小箱や鞘（さや）などの張り皮、曲物（まげもの）の綴（つづり）皮とし、また樹皮は去痰（きょたん）剤として薬用にする。食用としての利用、

果実を食用とする品種の3系統は、概ね甘果桜桃（[セイヨウミザクラ](#)、*Prunus avium*）、酸果桜桃（スミノミザクラ、*Prunus cerasus*）と中国桜桃（カラミザクラ、*Prunus pseudocerasus*）に分けることができる。

六月から七月にかけて実をつけるオウトウ（サクラの一種）の果実を日本では一般的にサクランボと呼び、栽培されている多くがヨーロッパの甘果桜桃（セイヨウミザクラ）系である。品種としては、佐藤錦の他に、紅秀峰、豊錦、ナポレオン、アメリカンチェリー等が有名である。佐藤錦は、明治より山形県東根市の佐藤栄助によって品種改良され、岡田東作が名づけて世に広めたものである。酸味が強い酸果桜桃（スミノミザクラ）は料理に利用される。中国桜桃は日本であまり栽培されていない。

桜漬けは、一般的に八重桜の花を梅酢と塩で漬けたものである。花（花卉）自体も塩漬けにすると独特のよい香りを放ち、和菓子・あんパンなどの香り付けに使われる他に、祝い事の席で桜湯として振舞われる。桜湯は、花の塩漬け2から3輪に湯を注いだものである。茶碗の中で花びらが開く過程から、祝い事に使われる。婚礼や見合いなどの席では「お茶を濁す」ことを嫌い、お茶を用いずに桜湯を用いることが多い。結納には両家の縁を結ぶという縁起を表し椀あたり2輪が用いられる。

桜の葉は、塩漬けにすることで加水分解酵素が芳香成分（クマリン）に変化しよい香りを放つ。桜葉漬けには多くの場合オオシマザクラが用いられており、伊豆半島南部において生産が盛んであり、シロップ漬けにされることもある。桜餅は、一般的な和菓子の一つであり、桜の葉の塩漬けで包まれた桜色の餅である。春にはこれらの風味を利用した食品なども見られる。

▲開花予想

下は2007年に気象庁が発表した同年における[桜前線](#)予想図



が、独自の手法を採り入れて行っているものもある。

注) 開花予想は当初は3月、4月の気温予想から、開花が早まり3月になったところから2、3月の気温予測(いずれも積算温度で)で、最近では1、2月の気温(休眠打破の時期?)を考慮しておこなわれる。

気象庁が定める東京のサクラの標本木は、靖国神社境内にある特定のソメイヨシノである。本来標本木がどれであるかは非公開となっていたが、東京の標本木については2012年にどの木が標本であるかを公開している。なお現在は各都道府県での観測標準木は公開されている。現代日本においてサクラの開花については特に衆目を集める傾向にあり、開花の時期になると、東京管区気象台の職員などが観測する風景を、複数のマスコミが取材に訪れる様子がしばしば見られる。

樹木全体から見た開花具合によって咲き始め、三分咲き、五分咲き、七分咲き、満開、散り始めなどと刻一刻と報道される。このように木々の様子を逐一報道することは、世界から見ても珍しい例である。

▲民俗

花といえばサクラのことをさすほど、サクラは日本の代表的な花木であり、国花ともされている。春の桜狩りは、秋の紅葉狩りと並んで日本の代表的な行楽行事とされており、大和の吉野山をはじめとして、サクラの名所とされている所が全国各地にある。花祭も盛んに行われており、京都の平野桜祭(上京区、平野神社)、今宮やすらい祭(北区、今宮神社)などが知られている。また、花見時に婚礼を行うのを嫌ったり、壱岐島のようにサクラを焚くことを忌む土地もある。「花月(かげつ)正月」といって、3月3日ごろ山野に遊んで花見をし1日を過ごすことは、全国的に春の行事として行われている。しかし農家にとっては、これは農作の忙しい時期に入る前の儀礼の一つであった。サクラの開花によって農作業の時期を知ることが行われ、山形県では「種蒔桜」といって、種播きの時期をサクラの開花によって判断するという。長野県下伊那郡では「苗代桜」といって、花の開きぐあいによって粃(もみ)播きの時期を知ったり、その期日を定めたという。また、同郡豊丘村の姫宮神社境内にある古桜になにか異常がおけると、凶兆であるという。3月の節供にはサクラの花を神様に供えたり、大枝を桶などに入れて庭に飾るが、「桜伐る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」といって、サクラを伐ると成長しないため?、伐るのを嫌う。

(この解釈には異論がある。ウメの翌年の花は今年伸張した枝につくが、サクラは毎年枝先の短枝的な枝につく。翌年花を咲かせるのであれば、ウメは花後の枝を切り新枝の伸張を促進する方が良いが、サクラは枝先を切れば翌年花は咲かなくなる。 KK)

サクラについての伝説は多く、なかでも「桜杖(づえ)」の伝説は全国各地で語られている。地に挿した杖が成長して樹木になったというもので、弘法大師とか西行法師などの名僧に付会したことが多い。これには「逆さ桜」というのがあり、根元より上のほうが太いとか、枝が下を向いているとかいう。香川県三豊(みとよ)市財田(さいた)町には、弘法大師がサクラの杖を地面に挿したのが花を咲かせたという「世の中桜」があるが、このサクラの花の多い枝の方角が豊作、少ない枝の方角は不作と伝えられている。似たようなものに、東京・谷中(やなか)の領玄寺にある日享上人(につきょうしょうにん)が挿したという「京師桜(会式桜)」や、長野県千曲(ちくま)市の佐野薬師堂境内にある「西行法師杖突桜」などがある。

また兵庫県明石市の人丸神社には「盲杖桜」というのがある。昔、筑紫(福岡県)からきた1人の盲人が人丸の塚に詣で、「ほのぼのと誠あかしの神ならば、我にも見せよ人丸の塚」と詠むと、たちまち目があき、大いに喜んで、不要となった杖を地に挿したものが成長したという。「駒繫(こまつなぎ)桜」とい

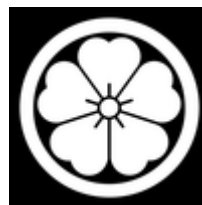
うのも多く、愛知県豊橋市の鞍掛神社には、源頼朝（よりとも）が馬をつないだという「駒止め桜」がある。静岡市熊野神社には、サクラの木の傍らに「桜塚」という小さな祠がある。これは「わんぱこ様」とよばれているが、昔膳碗（ぜんわん）が不足した際、この祠に借用を頼むと翌朝かならず効験があったという。以上のように、サクラも日本に広く行われた樹木崇拝の民俗の一つとして考えられたことがわかる。

古来、サクラの木は木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）の霊木とされ、伊勢神宮の桜宮は殿舎がなく、1本のサクラの木を神体としているといわれる。なお、サクラは日本の象徴のようにいわれているが、サクラの樹齢は比較的短いためか、伊勢の朝熊（あさま）神社のようにこれを神木としている例はあまりみられない。橘三喜（たちばなのみつよし）の『一宮巡詣記（いちのみやじゅんけいき）』には、「諏訪大社（長野県）の七木」というものがあり、「桜タイ木」というのがその一つに数えられている。これは、7年ごとに行われる大祭ののちに廻神（めぐりがみ）といって、村々を回る神使（しんし）が行う神事を湛（たたい）と称したことから、七木はその祭場を示す木と考えられており、その一つにサクラがあったことを示している。

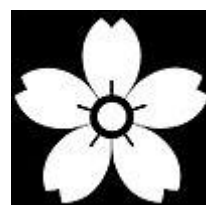
▲日本と日本人の精神性を象徴する花

桜では開花のみならず、散って行く儚さや潔さも、愛玩の対象となっている。古くから桜は、諸行無常といった感覚にたとえられており、ぱっと咲き、さっと散る姿ははかない人生を投影する対象である。

江戸時代の国学者、本居宣長は「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」と詠み、桜が「もののあはれ」などを基調とする日本人の



丸に桜紋



山桜紋

精神の具体的な例えとみなした。また明治時代には新渡戸稲造が「武士道」をサクラと同じ「日本固有の花」と例えた。このように平安時代や明治以降ではサクラは花のように散る人などの例えにされてきたが、江戸時代はそうにすぐに花が散ってしまう様は家が長続きしないという想像を抱かせたため、桜を家紋とした武家は少なかった。

日本では国花が法定されておらず、天皇や皇室の象徴する花は菊であるが、特に明治時代以降はサクラが多くの公的機関でシンボルとして用いられており、「事実上の国花」のような扱いを受けている。旧日本軍（陸軍・海軍）が桜の意匠を徽章などに積極的に使用したほか、明治時代の「歩兵の本領」や昭和時代「同期の桜」などの軍歌・戦時歌謡の歌詞に「桜」「散る」という表現が多用され、太平洋戦争（大東亜戦争）末期には「桜花」や「桜弾機」など特攻兵器の名称にも使われた。

また、明治時代以降はサクラは日本の象徴として国際親善にも利用されるようになった。全米桜祭りでも知られるアメリカ合衆国のポトマック河畔の桜も日米友好のために東京市長の尾崎行雄が寄贈したものである。なお、この返礼として日本にはハナミズキが贈られている。その他の国との間でも友好のために贈ることがある。

1967年（昭和42年）以降、百円硬貨の表は桜のデザインである。



▲分化史

日本人とサクラのかかわりを示すもっとも古い記録は、福井県鳥浜貝塚遺跡の縄文時代前期の地層から出土した弓である。弓筈（ゆみはず）（弭（ゆはず）。弓の両端の弦（つる）をかけるところ）の部分でサクラの樹皮で丹念に巻いて補強し、赤い漆を塗ったものが 3 例発見されている。サクラの樹皮を使った細工物は現代も続いているが、その中心地は秋田県角館町で、ここの樺（かば）細工は 200 年ほど前の天明年間（1781～89）に、佐竹家の藤村彦六が武士の手内職として広めたことに始まるという。なお、ヤマザクラの樹皮を茶筒や文箱などに貼り付けたこの細工は、1975 年（昭和 50）に伝統的工芸品に指定されている。

サクラが実用面で利用されたものに、さらに農事暦がある。各地に残る「種播桜」「苗代桜」などの名称からうかがえるが、これは古代人の桜観にもつながり、国文学者折口信夫は、『万葉集』の藤原広嗣（ひろつぐ）の歌「此（この）花の一弁（ひとよ）の中（うち）に百種（ももくさ）の言（こと）ぞ籠（こも）れるおほろかにすな」の背景には、サクラの開花を 1 年の生産の前触れとして重んじる習慣があったのではないかと推測した（『古代研究』）。また、サクラの花占いは『古事記』にも片影をみせる。木花開耶姫命の「木花」はサクラをさすという見方が一般的であるが、その姫は身ごもった子が天孫瓊瓊杵尊（にぎのみこと）の子であるかどうかを、自ら産屋に火を放って焼き占う。シカの骨や亀甲を焼いて吉凶を占うことは古くから行われていたが、その際に使った薪がウワミズザクラであったことは、『古事記』その他に記録されている。木花開耶姫命がサクラの象徴とすれば、サクラが吉凶の占いにかかわっていたことの裏づけとなろう。

こうした予祝とは別に、花を観賞の対象とする習わしは万葉時代からみられる。『万葉集』にはサクラを詠んだ歌が 42 首載るが、そのうちの 4 首ははっきりと庭や宿のサクラを詠んでおり、当時すでに観賞用として栽培下にあったことが知れる。

最古の品種はナラノヤエザクラで、聖武天皇が奈良の三笠山で発見して移植したと伝えられる。「古（いにしえ）の奈良の都の八重桜……」と伊勢大輔に歌われたナラノヤエザクラが各地に広がったのは、接木技術の発達によっており、藤原定家の『明月記』にその接木の話が載っている。鎌倉・室町時代にはフゲンゾウ（普賢象）、スミゾメ（墨染）、タイザンフクン（泰山府君）など、現在も伝わる品種が登場するが、爆発的に品種が増えるのは江戸中期で、文献には江戸時代を通じて 400 近い品種が名をとどめている。

▲文学

『古事記』履中（りちゅう）天皇の段や『日本書紀』履中天皇 3 年（402）11 月条などに「磐余（いはれ）の若桜の宮」について書かれているのが早い例であり、『書紀』允恭（いんぎょう）天皇 8 年（419）2 月条では、衣通郎女（そとおりのいらつめ）に天皇が贈った歌にサクラが詠み込まれている。『万葉集』では、140 首余りもあるハギ、120 首近いウメに比べて、サクラは 40 首ばかりで、それほど多いとはいえないが、「桜花咲きかも散ると見るまでに誰（たれ）かもここに見えて散り行く」（巻 12、柿本人麻呂（かきのもとのひとまる））、「あしひきの山桜花一目だに君とし見てば我恋ひめやも」（巻 17、大伴家持（おおとものやかもち））などと詠まれている。漢詩では『凌雲集（りょううんしゅう）』にサクラの詩が収められている。『古今集』のサクラの用例は、「桜」「桜花」「山桜」「花桜」「かには（樺）桜」（物名（もののな））を含めて 43 首、題からサクラと知られる「花」10 首もあり、「桜色」も 1 首加わり、ウメの

「梅」「梅の花」24首、題からウメと知られる「花」5首よりかなり多い。「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」（春上、在原業平）、「見渡せば柳（やなぎ）桜をこきまぜて都ぞ春の錦（にしき）なりける」（春上、素性法師）、「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（春下、紀友則（きのともり））などの歌がある。『枕草子』では、「木の花は」の段に「桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる」のを賞し、また瓶にいけられたようすが記されている。『源氏物語』では、「野分」で、紫の上の姿を「春の曙の霞の間より面白き樺桜（かばざくら）の咲き乱れたるを見る心地す」とよそえているのが印象的で、「花宴」のような華麗な王朝絵巻もある。花に耽溺し、「願はくは花の下にて春死なむその如月（きさらぎ）の望月（もちづき）の頃」（『山家集』）と詠んだ西行の風狂も有名。近世歌謡集の『松の葉』には「桜づくし」がある。本居宣長もサクラを愛し、「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」と詠んだ。芭蕉には「吉野にて桜見せうぞ檜（ひ）の木笠（きがさ）」「奈良七重七堂伽藍八重桜（ならななへしちだうがらんやへざくら）」がある。

王朝貴族にとってサクラの花は春の自然美の代表的な景物であり、咲き散る花の動きの微妙な変化に一喜一憂し、ひたすら花の姿を賞美した。サクラの花の散るのにいさぎよさをみるのは、近代のややゆがんだ受け止め方で、古来、文学の世界ではサクラの花はもっぱら賞美の対象であったのである。

出典 ©Shogakukan Inc.他

*日本の五大桜



[福島県三春町・三春滝桜](#)



[埼玉県北本市・石戸蒲ザクラ](#)



[山梨県北杜市・神代桜](#)



[岐阜県本巣市・淡墨桜](#)



[静岡県富士宮市・狩宿の下馬ザクラ](#)